

縁 ～ en ～

序

トゥルルル、トゥルルル
電話の音がする、でも私は起きたくなくて無い。まだ起きたくなくて無いんだ。

……ガチャ

もしもし、僕ですがわかかりますか？

ふむ？…おお、坊主じゃないか。久方ぶりじゃのう。

うん、といつても僕にとつては初めましてといっしょだけど

そうじゃったのう、どうしたんじゃ？

うん。ちよつと…悩みがあつて…といつても僕ではないんですけど。

おうおう、どうした？言うてみい。

あのですね…その…お…あ…あの人が限界なんです………助けてほしい。僕じゃ無理なんだ。約束を守ってくれないんだ。ううん、そんなことはいい。あの人にとつても僕にとつても大切な約束だけ…だっただけ、そうじゃなくて…！

落ち付け坊主…あの人？…ああ、分かった分かった。よう頑張ったのう。…つうん、うん。あの方は今も頑張ってる。いやずつと頑張り続けていく。なのに…それなのに僕にはもう何もできないんだ！

落ち付かんかい。…坊主が何も出来てないのなら大人のわしらは追いつめることしかできたらんわい。あの子のことは此方も考えがあるからそう焦るな。今わしが言いたいことは坊主の事じゃよ。今まで、よう頑張ったのう。

古谷 華月
(山本淳子ゼミ)

あ…よかつた。おじいちゃんが動いてくれるならあの人でも…でも僕は全然頑張れてない。だつて…あの本のことを聞いたら、あの本って何？…つて…忘れる訳がないのに本当に分からないように…！もつと早く勇気を出して聞いていれればもつと早く気付けたのに…あんな風になる前にもつと早く。

そうじゃのう。それは不甲斐無いかも…でもおまえさんは今踏み出したじゃろ、誰よりも早くあの子のことを思つて、何よりも貴いことじゃ。それにお前さんが居ったからこそあの子も今まで持ちこたえることができたんじゃ。否定してくれるな。

ごめんなさい。ありがとう…

よいよい…そうじゃのう…話は変わるがの、この前庭の紫陽花が咲いてのう。死んだ婆さんが大切にしようとしたものなのじゃが誰もみにきてくれなくてのう。死んだばあさんも悲しそうにしておるんじゃ。

え？…あ、うん！今度みんなで行くよ。お願いする！

おう、そうかい、そうかい。楽しみにしておるよ。

うん、うん！じゃあね。お願いします。

ガチャン！…ツ…ツ…

お？やれやれ、あやつらは何をしておるのか。…さてさて、あれは何処においたかの？

(う…う…う…)

頭が痛い。痛む頭に手をおいて目を開けてみる。目を開けても真つ暗な空間でした。

慌てて手を見ると不思議と手が見える。

真つ暗な所に自分だけが見えるなどという摩訶不思議な現象に首をかしげる。

(これが俗にいう覚醒夢かな?)

とぼけた事を言うのを許してほしい、変な空間にいるうえに自分の頭の中を探っても一瞬前に自分がしていたことが思い出せないんだ。

試しに自分の頬をつねってみる。・・・痛い。ならば現実か?

いやいや、こんな真つ暗な所知らんよ。そもそもここに居る経緯は?

「…何も分からない。泣くよ?」

「おうおう、混乱しておるのう」

独りきりだと思つて泣きごとをもらしていた所に笑い声が響き慌てて振り向く。

「誰ですか?!…あれ、おじいちゃん?」

そこにいたのは祖父だった。

会うのが数年ぶりだとはいえ知っている人間がいることにホツとして顔を緩ませるが、こんな状況で知っている人に出くわした所でそれが本人かなど確かめようがない。と言うよりものすごく胡散臭い。が此処にいるのが誰でもなく祖父と言う時点で祖父の日ごろの胡散臭さと相まってこれが祖父であることへの妙な説得力を出している。

「数年ぶり?…ん、胡散臭さ?ほう、いい度胸じゃのう」

何か咳いてから顔を強張らせている私に祖父が人の頭を撫で練り回しながら言う。祖父の額に浮かんだ青筋は見えないふりして…しかし祖父の中で私は何歳で止まっているんだ?

「ふむ、十歳位かの」

…少し、いやかなり、いらつとくる。私はもう十四歳だ。胡散臭いと思つた仕返しか?まあいい、変な空間で会う人間の名称など考えるだけ無駄だ。

それよりも聞きたいことがある。

「何で人の考えをナチュラルに読んでる?」

叫んだ私に呆れた声が聞こえた。

「訊く所はそこなのか。まだ混乱しているのかそれとも素でそれなのか。あえて言えば亀の甲より年の功というやつじゃな」

その言葉は答えになってないよ。どんなお年寄りが読心術をマスターするんだよ。

「普通は心なんて読めないから。化け物か!」

夢だからだろというつつこみはなしにしてくれ。まあそう言いつつこのお爺様なら読心術くらい軽く出来そうだ。

「化け物の所は隠さんかい。ばあさんや、孫娘がわしをいじめるんじや」

よよよと座り込んで今は亡き祖母に向けて嘆きながら訴えてくる。

…よよよと白々しいにも程があるが。

「もう気にせんが、聞こえとるぞ」

溜息を吐くおじいちゃん。

「いや、そんなことどうでもいいから、この空間から目覚める、もしくは脱出できるか教えてよ?」

いい加減会話にも飽きてきたので言う。

「どうでも…飽き…いや、うん、よし。この場所が何なのかはわしにも分からんが…抜けだす方法は知らなくもないのう。ついでに心が読めるのはこの特殊な所だからという事にしとけ」

直前まで落ち込んでいたくせに答えになっていない答えを返されても困る。しかし抜け出す方法が分かるのはもうけものだ。というか「という事にしとけ」ってどつちなんだ?

「それでじゃ。ここからの脱出をどうするかじゃが。知りたいか?」

此方の疑問を無視して得意げに語る祖父に先を言うように目で促す。私とその仕草にニヤリとあくどい笑顔で先を言う。

「知りたいか。ならわしにちよつと付き合え」

「は?」

てつきり目が覚める方法を言うと思つていた私は呆けた声を出してしまつた。

「わしに付き合えと言つたんじゃ、なんか分からんことでもあつたかのう」

わざと質問の意図をずらす祖父にほそりと言い返す。

「何でおじいちゃんに付き合わなければならぬのか全く」

「聞こえとるわ! わざわざ口に出すな! 濁せ!」

ナイス突っ込みだ、祖父よ。

「心の声が聞こえる時点で濁すことの意味が分からん」

今度は堂々という私に「まったく、かわいくない」なんてじいちゃんは
呟いていない。

ええ、聞こえないー。

「ハァ……この悪たれが。混乱する程度には可愛らしいののう。まあ良

いわい。…教えてはやらんがな」

あはは、溜息なんて聞こえないーい。

「って良いっていったのは嘘かい！」

思わず叫んだこちらに祖父も即答してくる。

「冗談じゃよ。目を覚ます方法はただひとつ物語を進めることじゃ」

一転して少し難しい顔をした祖父にまじめに訊いてみる。

「物語？何の物語を？」

君の物語と言えばーじゃないか。

「？」

一瞬間こえた声は祖父かとも思ったが祖父には聞こえてないらしく話を
続ける。

「行けば分かる、帰りたいなら進め」

しごく簡単なことを言うようにあっさりと答える祖父に先ほどの疑問が
かき消える。

「えっ、移動するのってどうか出来るの？」

驚くと祖父は溜息吐いた。

「黙って目を閉じんか」

話が進まないと思ったのか言葉にするのが面倒くさくなったのかは分
からないが祖父は強制的に話を終わらせる。

祖父の手が目を覆いかくすとともに私の意識が闇に沈んで行った：

海の中の物語

ゴボツ

目を覚ますといきなり水の中だった。私の吐いた息が水の中に気泡とし

て生まれる。光を受けてゆらゆらと海面へ登る姿がとても綺麗だ。

…ということはいきなり水中です。殺す気か！

「息、出来るかの」

ひょいと此方を覗き込むようにして普通に話しかけてくる祖父にイラッ
と来て叫ぶ。

「先に言え！」

カッカと笑う祖父に本気で殺意がわく。しかし息が出来ないことの方が
一大事なので怒りを取り合えず後回しにして祖父に従い恐る恐る呼吸を
してみる。先ほどの様な気泡が生まれることはなく呼吸も出来た。

呼吸ができると後回しにした怒りがふつふつと湧く。変な空間から抜け
出せたと思ったら今度は水の中とはなかなかいい度胸してるよなお爺
様？

さすがに死にかけたので胸にふつふつと怒りが込み上げて来ていると祖
父が話し出した。

「ここは人魚姫の世界じゃ。知っておるじゃろ？ハンス・クリスチャン・
アンデルセン作『人魚姫』」

祖父の説明にまた仕方なく憤りを治めて辺りを見渡して見る。きれいな
コバルトブルーが広がっていた。

何処までも広がる青色に宙に浮いているような錯覚を覚える。上からは
太陽の光が波の合間を縫うようにしてさしている。とても幻想的な光景
だ。

「人魚姫…か。あらずじくくらいは知ってるよ…」

しかし、何故に童話の世界なのか問いたい。いや物語と最初に言ってい
たが、昔話とかでも良かったのではなからうか。しかも人魚姫とは、祖
父のくせにやけにメルヘンな。内心愚痴っていると自分の考えに夢中で
祖父が此方を観察していることに気付けなかった。

「物語を進み、道を開け」

唐突に人さし指を此方に向けて祖父がいう。物語を進める方法がそれな
のだろうか。

「でもこの広い海の中でどうやって人魚たちを捜すのさ」

見渡す限りの青の中に一群の魚が優雅に泳いでいるがそれだけだ。

「あれをみてみい」

祖父の声に祖父の指した方向を向いてみる。しかしそれは、先ほど見た魚の群れだった。

「魚がどうしたの」

疑問符を浮かべた私に祖父はやれやれとでもいうように溜息をつく。

「ここは物語の中だと言っておろう。意味のないものが浮かんでおるわけがなかるうが」

「あー、なるほどって分かるわけがないでしょうが」

言われたらそれもそうかとも思わなくもないが理不尽な言葉に呆れて言うが祖父は此方の言葉をスルーする。そして魚を目で追いつつ魚の群れを追うように指示を出す。

「兎に角あれを追うぞ」

「分かったよ」

無視されたことには思う所があるが祖父の言う事ももつとなので短く返事をして、目の前から消えかけている魚の群れを急いで追う。泳いでいくものかと思ったが意外にも走れる。何を踏んで走っているんだとかそんなことは後回しにして追うことにする。―考え出したらむしろ走れない気がひしひしする。

魚の後を追うと薄暗くなってきたが不意に目の前に青い光が見えた。ほんやりした不思議な光に警戒しながら祖父に訊く。

「おじいちゃん、あれはなに」

祖父はニヤリと笑って答えた。

「着いたな、あれが、人魚の王のお城」じゃ。正確にはそこにある砂が青い光を放っているんじゃないが、近くに行くと城も見えるぞ」

「へえ」

祖父の言葉に警戒心が解け、好奇心に駆られて近づいてみる。なんだかんだ言いつつ祖父の言葉で警戒心が解ける自分に苦笑する。祖父のことは信用しているんだ。

「…わあ、さんこの壁、ここはくの窓、ああ、貝殻の屋根」で出来てる。あ、ほらほらおじいちゃん、魚が鳥みたいに飛んでるなんて本当に

見れるとは思わなかった。あ、あれ太陽だよ。あはは、本当に、紫色だ」その姿に祖父は安堵のため息を吐く。混乱をしても取り乱すことなく落ち着きを放っているのに危うさを感じたが子供のようになら無邪気に喜ぶことが出来るなら大丈夫だろうと。祖父の心配に気付くことなくあたりを見回す。熱心にあたりを見回していると、とても懐かしい何かの不意に心をかすめた様な気がして動きを止める。それはひどく苦いような気がして。

「…」

そんな不自然な沈黙に気づいたのか気づいてないのか祖父は先ほど私が行った順に顔をめぐらせる。

「それにしても、よく覚えておるのう」

また先ほどの苦さがかすめた様な気がして一瞬詰まるが答えをすぐに返す。

「…見たらわかるものばかりだからね」

「そう…じゃな」

自分でもよく分からない苦みに顔を歪めたことに今度は確実に気付いただろうに何も追及しない祖父に感謝しつつ次にとる行動を聞いてみる。

「そうじゃな、別にどこに行ってもいいんじゃないが」

「うーん、じゃ…」

「そこに居るのは何者です！」

被るように叫ばれ横を見るとそこには人魚がいた。姫君のようだ。

「え？…えーと？…これどうすればいいのかな」

混乱しつつ祖父の方を向いて訊いてみるが祖父が答えるより先に人魚が続ける。

「どこを向いてしゃべっているのですか」

「え、あの、どこかは」

人魚の声にさらなる混乱をしながらおどおどする私の頭を掴んで祖父が話し出す。

「申し訳ない。私はただの旅人。しかしこのを荒らすものではありません。許可は既に頂いております。」

規定されている口上を上げるように言う祖父。しかし祖父が話している

縁 ~ en ~

はずなのに自分の口から言葉が零れる。自分の意志では喋ることも動くことも出来なくなり恐怖を覚えて混乱に拍車がかかるが此方の感情をおいて二人の会話は進んでいく。

「そう、あなたが、理解しました。イレギュラー発生。許可の審査。確認。認証」

理解したと言うとフツと虚ろになったかと思うと何かを呟きました。動けないまま怖々とみていると

「ごめんなさい、旅人さんが来ていることを忘れていたわ。ゆっくりしていつてね。」

先ほどの行動を忘れたように優しそうな笑顔で此方に言いここから去って行った。

ボカンとしていると祖父がすまなそうに言ってきた。

「すまん、すまん。忘れとったわい」

「許可って何」

先ほどの事を聞いてみるがこれには答える気が無いらしく何も言わない。仕方なく次の質問に行く。

「おじいちゃん、周りからみえてないんだね」

大きくため息をはきつつ訊く。

「あ、そっちはわざと言わ…い、痛い痛い、いたたた」

途中から鬱陶しいことを言い始めたので取り合えず手を締めあげる。

「どうかおじいちゃん今の何。動けなかつたんだけど」

「いたいいいい」

「あ、ごめん」

「と言いつつ続けるんじゃないた」

ギリギリと締めあげていたがちらりと見るとすでに半泣き状態の祖父がいてわずかに溜飲を下げる。

「しかたないな」

そう言いつつポイツと手を放す。祖父は放された手に息をふうふうとわざとらしく吹きかけて痛がっているが無視して一言で続きを促す。

「ひっ」

不機嫌なこちらをチラチラ見ながら話すか話すまいかを考えたしたので

笑顔で問う。

「話した後に殴られるか、話した後と前に殴られるのどちらがよろしいか？」

「すまん、取り合えず排除される前にあちらと話を付けて起きたかったんじゃない。混乱しておるお前さんを言いくるめてからでは遅くなりそうじゃってのう」

速攻で話し始めた祖父に呆れた溜息を吐く。

「最初からそう言えはいいいじゃないかっ」と

と、の所で殴る。無視の数々や鬱陶しい言動をはらすように殴る。もちろんいきなり海に落とされた憤りも込めて。

「ぐは」

想い描いた通りに弧を描いて落ちる祖父を見つつ呟く。

「許すとは言っていないし選択肢は言ったもん」

「なにをするんじゃない」

そんなこと知るかとかくつかかってくる祖父に今度は此方も負けじと怒鳴り返す

「こっちのセリフだ！どれだけ怖かったと思ってるんだ！」

少し涙目になっているのに気付いたのか渋々さがる祖父に続けて言う。

「にしてもすごいね。ここまで綺麗に弧を描くとは思わなかった」

綺麗な放物線を思いだしながら言うとし怒りながら説明をし始めた。

「最初に言ったじゃろうがここは夢みたいな世界じゃから思いが全てじゃと」

「どうか私の考えてる事分かるんなら避ければいいのに」

ぼそりとこぼすと呆れた様な声が返ってきた。

「ほぼ無意識下と同じ状態で殴ってきおってからに何を言うか」

「ああ、つまり、頭より早く体が反応していたから分からなかったと」

「そんなもんじゃな。お主の中で殴るのは決定事項であつたと」

「ちゃんと言ってたしね」

「それでも普通は殴らんわ！」

その言葉には無然として答える

「ムーおじいちゃんは知らないかもしれないけどさ、これでも私はおと

なしい人間なのに」

「…とそんなことよりさっきの人魚…おらんな」

言い合いをしている間に去って行つたらしい。はぐらかされた様で悔しい。

…でも本当に祖父は私が大人しい…いや大人しくなった私を知らなかつただろうか？

「取り合えず人魚さんに会わないとどうしようもないね」

変な考えを振り払うように首を振つて言う。

「そっじゃな」

そんな私の疑問符をきいていただろうに祖父は何も言わない。私も聞かない。

「じゃあ人魚さんが来るまで何しよう」

辺りを見渡しながらか考えるが目殻の屋根が美しい真珠を代わる代わる見せている以外の変化がない。まあ、綺麗なんだけど。

「ふっふっふ、まあ、見ておれ」

祖父はあやしく笑つた後に指をパチンと鳴らすとそれに呼応するように人影が現れた。その人影は優雅にひれを動かしながら進んでいる。

「あつ人魚…人魚!」

「はっはっは、こういうときにも使えるんじゃないね」

「狡くない?」

呆れて言うと今度こそはぐらかした。つーか指鳴らす必要性ないじゃん。というか最後まで飛ばせばいいのではと思わなくもない。

「出来るわけないじゃろう。それより、追いかけてよいかのう」

祖父に追い立てられるように人魚を追う。

「あれ?さっき見た人魚と同じだ。…一番上のお姉さんじゃない?」

「そのようじゃのうどこに向かつておるのかのう?」

祖父の疑問はすぐに解けた。一番上のお姉さんが向かう先には五人の人魚が歌を歌っているのが見えた。一番上の姉はそこに向かつているよう

だ。歌を歌っているその声が此方まで届く。先ほどまでは全く持つて耳に入ってきてなかった曲が耳元で奏でられているように聞こえてきた。そう考えたのに気付いた祖父が説明をしてくる。

「ここはどんなに現実的に見えようとも夢じゃからな、本の中と言う訳じゃ。気づかなければいけないものと同じじゃ。じゃがのう、たかが夢とバカにせずに真剣に向き合え。」

やけに真剣に入ってくる祖父に黙って頷いた。たまに見せる真剣な表情の時は無視するとひどい目に遭う。前に祖父の言葉にそむいて祖父の家の近くの森に入って遭難した時も遭難する前にひどく真剣に言っていたのを覚えている。その時から祖父が真剣に言っていることは無視しないようにしてきたが他にももう一回有つたような…。

「まあ、今はこのきれいな音色を聞いとこうかのう」

祖父の言葉に思考を停止させて歌声に耳を澄ます。歌を歌っているはずなのに何かの楽器が旋律を奏でているような綺麗な響きを思わせる。ひとつひとつの異なる六つの音色が重なり合つてまるで波の様にあたりを漂う。しばし聞き惚れていると誰かが来たようでも人魚たちは歌うのをやめた。どうしたのかと思ひ見るとと牡蠣を十二個も尾ひれにつけた人魚が来て部屋に入るように人魚たちを促しているようだ。恐らく、人魚の王様のお年寄りのお母さん、人魚たち曰くの、おばあ様。どうやらおばあ様は皆を集めて地上の話をするようだ。末の人魚は待ちきれないとばかりにそわそわと落ち着かない。おばあ様がどのように話すのか気になったのでその場に留まることに決めた。話し始めるのを待っているとおばあ様が此方を見た。そして柔らかい口調で問う。

「お客様もどうかしら。わたくしが見てきた海の上の景色の話は今からするので。ぜひお聞きして行つてはどうかしら。旅人さんにはつまらない話かもしれないですけどもどうぞこちらにお座りになってください。」

その言葉に真つ先に反応したのは私ではなく末の人魚だった。

「旅人さんは海の上に行つたことがあるの?素敵ね。ぜひお話が訊きたいわ」

物静かदैいつも考えこんでいることの多い末の人魚の珍しい反応におばあ様は苦笑しながら此方の話を聞いてからにしないかと嗜める。はいと反応しつつも此方が気になる様でチラチラとみてる。どうやら此方が

話すことも話を聞いていくことも決定事項の様だ。異論はないので大人しく近くに腰をかけておばあ様の話を聞く体勢を取る。祖父も聞く様で横に座りこんだ。

「では話し始めますね。そうね、どこから話そうかしら…」

そこから始まった海の上の様子は私の目に映っている光景より美しく神秘的だった。

「…海の上では花の良い香りがしています。そして森は緑色でそこに見える隠れてしている魚が高く美しい声をわたくしに聞かせてくれるのです。わたくしはその声を聞くのをとても楽しみにしていました。よいですか、おまえたちが十五になったら、そうしたら、海の上に浮かび上がっていくことを許してあげますよ。その時は、岩の上に座って、お月さまの光を浴びながら、そばを通る大きな船を見たり、森や町を眺めたりすることができますよ。おまえたち何を見ているのも自由ですが、何か心にとめておくようなものが出来たらと願っています。危険も伴いますので気をつけるのですよ。特に明日、海の上にはじめていく末の娘。貴方は思慮深くもあります私が私とはとても心配しているのですよ。海の上は怖いこともありますから気をつけなさい。」

さて、お客様には稚拙な話を長々とお聞かせしました。この後もうぞごゆるりとお過ごしくださいます。おまえたちもあまり迷惑をかけないようになさい。ではお客様、お先に席を外させていただきます」

そう言っつて話を終えおばあ様は出ていく。私は慌てて礼を言いその姿を見送った。

おばあ様の何処までも人魚たちを思っている心が人魚たちを見ている優しい目と言葉や態度に表れていた。可愛くて仕方ないのだろう。ここにいることがひどく場違いな気がして遠くで見るのでなく此方に聞きに来てしまったことを少しだけ後悔した。

「ねえ、海の上の話を聞かせてほしいわ」

なんとおはなしにおばあ様が去って行った方向を見続けていると末の姫から声をかけてきた。他のお姉さま方は海の上の話はもういらしく此方に手を振ると自分の部屋へと戻って行く。

「お姉さまたちは一度海の上でているもの、いつでも出られる海の上

にはもうさほど興味がないのかもしれないわ。お姉様たちは聞かないみたいだから私の宝物を見ながら話しましょうよ。私のお庭に案内するわ」

そう言っつて私の手を取り泳ぎ出す。慌ててその後をついていく私に祖父がゆっくりと歩いてついてくるのが見えた。末の姫は興奮が冷めやらない様子でお城を出て庭がある所まで泳いでくると自分の庭へと泳いでいった。そこは、お日様のように赤く輝く一面に咲く花と美しい大理石の像とそれに寄り添うように生えているバラ色のシダレヤナギだけの美しい形の花壇だった。

「その大理石があなたの宝物ですか？」

一つだけおかれた大理石を見て言うとお末の姫はとても嬉しそうに此方を振り返り満面の笑みで言う。

「そうなのよ。私の大切な宝物なのよ」

そして大理石をなでるとうっとりとして話し始めた。

「海の上はきつと素敵なもので溢れているのでしょね。魚の歌声も花の香りも鐘の音も。ああ、早く十五になりたいわ！私、海の上の世界と、そこに住んでいる人間が、きつと好きになれると思うわ。でもまだもう少し先なのよ…けど今日は旅人さんがいるんですもの。私が明日まで海の上にいけないことを慰めるために色々なことを話してほしいわ」

溜息をつきながら話す末の姫の話を聞いて明日は…と思いを巡らす。明日は普通に学校があるはずだ。だって今日は平日のはずだから…でも私はこの夢を見る前に何をしていたんだろう―ふとよぎる疑問を無視して先ほどから何の反応も見せない祖父の方を見る。祖父は微笑んだままで何も答えないが夢の中で焦っても何もできないと思ひ直し末の姫に言葉を返す。

「そうですね、具体的にはどのようなことがお聞きになりたいのですか？」

特に話すことがないので聞いてみるとすぐに返事が返ってきた。

「素敵なものを知りたいの。だから貴方にとって素敵と思うものを知りたいわ」

「え…」

思いがけないことに言葉を失くしてしまう。

「そう…貴方の宝物ね」

妙案を思いついてと言うように手を打ち鳴らし、くるりと回って此方を
見てくる。

宝物?…宝物…記憶の底にある大切な大切なもの。

「私の宝物は……」

あれは…あの本は…

思い浮かぶ装丁の綺麗な本。子供に持たせるには少し不似合いな装丁。
渡してくれたのは大きな手。読んでくれたのは優しい声。あの本もこの
世界みだりに綺麗なコバルトブルーをしていた。あれはどこに…

「宝物は?」

思考の海に落ちていた意識が末の姫の声で浮上する。一瞬のうちに消え
て行ったものが何か思い出せない。

「…ごめんなさい。私の宝物は特には思いつきませんでした。他のご要
望はありませんか?」

ゆつくりと首を振って答えた私の言葉に納得がいかないのか頬を膨らま
せて末の姫が例えはと言う。

「その服は?とても可愛らしいわ。ひらひらとしているのが波のようで綺
麗だわ」

裾についているレースが揺れる様は確かに上を見上げれば見える波がゆ
らゆらと光を受けて揺れている光景にも見える。末の姫の言葉に一瞬虚
を突かれたように固まってしまったがこの服のことを思いだす。腕をあ
げてレースを揺らすと綺麗なレースの模様が目にはいった。それに少し
目を細めて見る。そうだこれは…

「そうですね。この服は父が私にくれた物です…宝物と言えるかもしれ
ませんね」

貰った時のことが頭によぎる。私はあのときどんな事を思っただろうか。
「まあ、素敵だわ。家族がいるのね。どんな人たちなの?」

私の言葉に興味から家族に移つたらしい。興味津々と言う風にきら
きらとした目で見てくる末の姫に苦笑しながら続ける。

「父と母、弟とそれから祖父がいます。私にとってとても大切な人たち
です。」

—本当に?

「仲の良い家族でも祖父の家にはこの頃行っていないんですけど」

—本当に?祖父の家に言っていないの?…仲の良い家族って誰を除いて?

「ああ、でも母方の祖父の家に行くことがないので父方の家には
毎年お盆と正月に挨拶に行っていますね」

—本当に?君は挨拶なんてしたかな?返してもらったことなど無いのに
「それから弟の誕生日にも行くんですよ。弟も楽しみにしてて」

—本当に?ならなぜ弟はあのとき君のもとに来たの?

「仲の良い家族なんです。」

—…そうだね君がいなければね。

「っ。」

いちいちとうるさく何か聞こえる—よく聞いているようなでもそんな
こともないような。顔をゆがませた私を見ないまま末の姫はとても嬉し
そうな声で言う。

「へえ、それは素敵な家族ね。私のお父様やおばあ様、お姉さま方も素
敵なのよ。私の宝物。とても優しいのよ。怒ると怖いんだけどね」

怒られた時のことを思い出したのか体を少し震わせた末の姫を見て微笑
みながら言う。

「家族の仲が良いのですね」

「ありがと。家族のことを褒められるのは嬉しいものね。貴方も家族
のことを褒められると嬉しいかしら?」

「え、あ、はい…嬉しいですよ」

笑顔で答える。

そうだ、私は嬉しいはずなんだ。家族を褒められて。

「一緒ね、うれしいわ。あなたのお父様やお母様も怒ると怖いかしら?」
怒ると?

「そう怒られたことがある?」

怒られたこと…

「ふふ、あるに決まっているわよね、仲の良い家族なんだから」

「…ありますよ。あるに決まってるじゃないですか…仲の良い家族なんですから」

そう、少し思い出せないだけで…あるんだよ。

「そう言っても弟の方が怒られることは多いんですけどね」

明るい口調で付け足す。

「この頃きちんとしてきましたが、やっぱりまだ幼いので」

言い訳のように言葉を重ねていると人魚が海上を見る。

「あら、もうこんな時間。お城に戻らないとおばあ様に怒られてしまうわ。

お話の途中になってしまつてごめんなさい。」

つられて顔を上にあげると月が出ていた。さっきまで太陽が照っていた

のに何故と見回すと祖父が此方を見ていることに気付く。祖父の方を見

ながら固まっていると末の姫が本当にごめんなさいと再度詫言を入れ

きたので、此方もこんな長い時間まですみませんと慌てて返事を返す。

「私はもう少しこの庭を見てから帰ります」

そう伝えると末の姫はどうぞごゆつくりとだけ言い尾を返して去って

いった。その後姿を見送つてから祖父の方に振り向く。

「聞いてた？」

何がとは聞かないしどこまでも聞かない。そして祖父も黙つたままだ。

私は祖父の姿を見ながらぼつぼつと話す。先ほど祖父が時間を変えてま

で遮つてくれたことを…家族の話を。

「私はさ、弟のことを殺そうと考えたことが一度あるんだよ。失敗した

けどね。」

溜息を吐く。あの時、弟がああ呟いてなかったら私はどうしていただろ

うか。

「リビングで弟が一人で寝てたんだ。私はこの子さえいなければって、

自分の価値を自覚することもなかったのにつて。馬鹿だな、価値は変わ

らないのに。…まあ、そこはいいんだけど。その時に、手を伸ばしたと

きにパパ、ママって笑顔を浮かべるから。その夢に自分がいるのかどう

か気になったから殺せなかったんだ。後で聞く勇氣もないのに」

自分が願ったのはその夢に居ないことだけだ…いまだにその願いがか

なつたかを私は知らないでいる。自嘲気味に笑う。

いつの間にか俯いていたらしい、祖父が頭をなでてくる。

「お前には出来なかったよ。笑顔なんて些細なことを理由にしてやめた

お前には弟を手にかけることは出来なかったさ。それがお前にとつて良

いことであれ悪いことであれ事実じゃ」

「でも殺そうとしたことも事実だよ」

「…それが罪だと言うのならわしは生きとらんぞ？」

「じいちゃんにもあるんだ」

「この年になるまで何度もな。それにじゃな、聞けなかったのなら次に

聞けばいいじゃろう。その答えがどちらであれきつと大したことはない

ぞ」

人の悩みを大したことないときっぱり言つてしまふ祖父の言葉に少し

笑つてしまふ。

「その前に弟はそんなこと覚えてないよ…でもありがとう。」

照れ隠しに小さく言うときさすぎたらしく聞こえなかったらしい。祖父

が何も言わないので誤魔化すように言う。

「次行こう次！」

速足に歩こうとすると呆れたようにどこに向かう気じゃといわれる。

「人魚姫が海の上に行くのは確か夕日が沈むころだっけ。じゃあそこま

で時間を進めればいいよね…」

「馬鹿者が、夢の中とは言え意識はつながつておるのじゃぞ、不休で動

いておると手痛いしつべ返しが来るわ」

さつさと物語を進めようとすると祖父が慌てたように忠告してくる。

「いやでも、休む所なんて無いよ」

あたりを見渡しながら祖父に聞く。当たり前だが辺り一面砂だ、しかも

起きているときには綺麗だが寝るには不向きな光を放っている。ついで

に夢の中で寝れるのかという疑問もある。

「夢の中でも寝れるから休めというところんじゃ、分かったら休まんかい」

そう言うのと同時に大きな真珠貝が出てくる。どうやらこれで寝ると言

う事らしいが、

「…乙女趣味」

齢七十はある爺のすることではない。

「うるさいわ、わしが考えたことではないわ。昔お主が言ったことじゃろうが」

「え!? 言っていないよ」

こんな少女趣味は私の趣味ではない。だいたい私はシンプルなものが好きなんだ。

「即答かい、こんな小さいときじゃったからな」

祖父が親指と人差し指で小さな隙間を作る。そんな小さいときがあるわけがない。

「ま、二・三歳のときじゃったな」

「覚えてなんているわけがないでしょうが! というより忘れて下さいこの爺」

若かりし頃の過ちを出されて叫ぶ。

「ほほほ、若い者の恥をさらすのは年寄りの特権じゃわい」

「寝ろ、爺!」

良い笑顔で行ってくる祖父に叫んで真珠貝の上に転がる。

「その貝は閉じれるからの、眩しかったら閉めて寝ればよかろう。」

まだまだ笑っている祖父をしり目に貝のふたを閉じる。疲れているつもりは微塵もなかったのに目を閉じると数秒も数える間もなく深い眠りに落ちた。

閉じた扉の外で祖父は言う。

「お主に罪があるのなら、その元凶になったわしらの罪はいかほどのものになるうか。自分など不必要と思うておるのはお主だけじゃ、気付け。」祖父の声は届くことはなく泡となって消えてしまったが:

少女の寝顔は貝に隠れて見えなかったが祖父は少女の夢路が良いものであることを祈る。この青く輝く夢の行方を。

暗い、少女は気づいていたこれが決してよい夢でないことを。なぜならよく知っている十歳位の少女の背中が見えているから。泣いているわけではないことが分かっていたが、涙が出ていないだけという事も分かっていた。女々しい少女の涙の無い泣きごとだと気付いていた。だからただ少女の泣きごとを聞こうと私は耳をすませる。少女は語り出す。

嫌われるのが怖い

無関心が怖い

見えない心が怖い

私は本当に必要な人間ですか?

あなた方にとって。

嫌いですか?

それとも興味すらないですか?

あなた方の心は私には理解出来ません。

要らないのならどうして:

:初めは弟が出来た事が嬉しかったんです。

そして両親の想いを知りました。

願いました。望みました。

希望が絶望へと変わり諦めとなりました。

まず弟を憎んだの。

そして両親を憎んだの。

最後に自分を憎んで:諦めたの。

今までの頑張りが無に帰る選択でした。

でもそれで良かったんです。

弟を憎まなくなりました。

両親を憎まなくなりました

自分を憎まなくなりました:ただ、諦めへと変わってしまいました。

私は私と言うものの存在を諦めました。

弟を憎まなくなつて喜んだの。

両親を憎まなくなつて喜んだの。

自分を憎まなくなつて何故憎まなくなつたかを知ってしまったの。

そして気付いたの。まだ、憎んでる事に。

縁 ~ en ~

いえ、諦め切れない自分に。自分への憎悪に変えることにしたの。大切な人に見向きもされない自分など要らないでしょ？

家族に触れなくなりました。

…気付かれませんでした。

私がどのように思おうと、どのような行動をとろうと自分があの人たちに必要でない事を知りました。

それでも諦めきれなかったの。

自分の存在を気付いてもらおうと必死になったの。

ダメな所を探したの。

すぐに見つかったわ。だって気付いてたんだもの。

でも、自分が自分だからダメなんてそんな答え私には許容できなかったの。だから私は無理にでも理由を付けたの。

嗤っちゃうわね。

探しました。

そしたらヒントをくれました。

きっかけは宿題でした。

『自分の名前の由来を知ろう』

先生曰く

お父さんとお母さんが頑張ってつけてくれた名前です。自分の名前の由来をお父さんやお母さんに聞いてみましょう。

こんな私でもつけられた名前…

嬉しかったの。希望がまた目の前に落ちて来たような気がしたの。

すぐに絶望に変わるなんて知っていたのに。

—っていうのはな、絆という意味なんだ。たくさんの出会いを経験して

立派な人間になって欲しくてつけた名なんだよ。

うん…うん。

嬉しかったの。興奮して眠れないなんて初めてだったわ。

だから、聞いちゃったの。

ふふ、あの子の名前。本当は男の子につけたかったのよね。

楽しそうな声が耳にいたい。理解したくないの。たわいない話と流したいの。実際にたわいない話だったの。けど流れないの。

固まる少女をおいて話は進み、毒の様にしみ込んで行く。それは人魚姫が希望と共に飲んだ毒が酷く痛むように、少女の希望が大きいほど鋭い刃となって痛みました。

エコーでは、ちゃんと男の子と判断されたのね。

不思議と女の子だったな。

あの時がすっかりしちゃったわね。

まあな…とその男の子の方がお呼びだ。お姉ちゃんを起こす前に泣きやませないと。

あらあら、お姉ちゃんと違って手がかかる子ね。

お姉ちゃんは手がかからないからな。頼られないのも…ああ、ほら泣き

声が酷くなってきた。お姉ちゃんを起こさないように早く泣き止んでも

らわないとな。

手がかかるわね。でも、念願の男の子だったのですもの。可愛いわ。

本当にお前はこの子に甘いな。

可愛い男の子が欲しかったんですもの。

少女の呪縛がようやくとける。少女は呟く。ありがとう、欲しかった答え、と

だって否定でないでしょ？私の存在が要らないわけではないもの、あの子が必要な存在だったただけそれなら大丈夫、私はきつと大丈夫。

弟の存在を喜びました。

少女の嘆きがやむ。理性と感情のはざまで揺れる、どこまでも子供でしかない少女の嘆きは少女にしか届かない。

私はそつと背を向けて起きることを待つ。そしてこの声が、たまに聞こえる私を君と呼ぶ声だとようやく気付く。

「君だったんだね」
今日の私はこの事を覚えているかを考えながら。覚えて入れる確率はそんなに高くないだろうとは思う。少女はもう話さない。

私はちゃんと気付いているこの少女が自分だと。この出来事が何であるのかを。私に君が言ったことはすべて私が私に言ったことだと。

…私が両親との間に溝を作った日。完全な溝になるまでもう少し。

目が覚めると真つ黒でぎくりと身を強張らせた。何の夢を見ていたかは覚えていないが、この反応は十中八九あの夢であることが分かる。我ながら女々しい。いつまでもこうしていてもしょうがないので貝のふたを開けて外に出る。息苦しさから解放されるがここが海の中だと気付いて苦笑する。

「どつちも空気があまりない所だと言うことに変わりないけど、これも空気がおいしいで合ってるのかな？ねえ、おじいちゃん」

いつの間にか横に立っている祖父に聞く。ついでに言うとならば祖父が寝ているのを見たことがない。いつ寝ているのだろうか。

「おはよう。よく眠れたか？」

多分だけれど祖父には昨日の夢が見えていたように思う。他人から見たらくだらない理由。でも祖父はまだ言わないでいてくれる。だから私は元氣よく挨拶をする。

「おはよう、おじいちゃん。おじいちゃんこそいつ寝て起きてるのさ？寝顔いまだに見たことがないんだけど？」

「当たり前じゃ、わしの寝顔はばあさんだけのものじゃからな」

祖父がのろけ出したが正直気持ち悪いだけである。

「失礼な奴じゃな。」

「うっさい、そんなこと言いながらおばあちゃんにだつて寝顔をそうそう見せなかっただろうくせに」

凶星をついたらしくうぐうと唸っている。そんな祖父に笑いながら今日のことを確認する。

「お日様が沈んだ所だったよね？末の姫が海の上に行くの」

「そうじゃよ」

ふてくされた顔をした祖父が頷く。

「じゃあ今から行けば、末の姫の着飾っている所が見れるね。」

確か牡蠣を尻尾に挟んだりお化粧をするはずだとわくわくとしながら言う。

「やっぱり女の子じゃのう」

そんな様子を見てしみじみと言ってくる祖父にこんなに女の子の格好をしているじゃないかと手を広げて見せる。長い髪、レースのついた上着にチュエック柄のスカート、タイツにブーツ。女の子の服装だ。

「お前さんの父親の選んだものじゃろうが」

祖父の言葉に頷く。

「そうだよ、でも結局はこんなのばかり着てるから…」

手を揺らすとやはりレースも揺れる。

「お主の好きな服はごてごてしとらんものだと思うておつたがのう」

私は笑ったまま何も言わなかった。

「…まあ、よいがの。それよりも今は末の姫の所に急がんとこのう」

「そうだね。牡蠣を尻尾に挟んだよね。痛いんだっけ。と言うより貝の外側って綺麗じゃないような気もするけどおシャレになるのかな？」

話しててふと牡蠣の貝殻を思い出して言ってしまう。中は綺麗だが外は特に綺麗でもないよなと悩んでいると祖父が思いついたとばかりに手を打つ。

「権力誇示ではないのかのう？稀少ないじゃろうて。」

確かにその通りだろうけれども祖父からもれた言葉は嫌な現実感があったので却下した。

縁 ～ en ～

「うーん、童話の中なんだからもう少し夢があつて欲しい。」
取り合えず無茶ぶりをかます。

「ふむ、童話の中の貝は表面も綺麗じゃった、でどうじゃ」

「根本の問題を粉碎しやがりましたね」

恨めしげに言うが祖父はどこ吹く風だ。

「まあ、そんなことより急がんと本当に末の姫のドレスアップを見逃すぞ。ここは進めることができて、一から繰り返すことができて、戻れることは出来ないからのう。」

「何その微妙な機能」

ぼそつと言うが聞こえないふりして祖父が急かす。

「ほれほれ急がんかい」

「はいはい」

昨日末の姫と歩いた道を逆にたどる。青く揺らめく光をまとった砂は変わらずそこにある。その砂を蹴りながら進むとすぐにお城まで着いた。すぐに末の姫のいる部屋に入らずに祖父に思いついたことを聞いてみる。本当にふと思いついたことだ。くだらない期待だ。

それでも、私が末の姫に会う事を楽しみにしているみたいに人は人と会うとき何かを期待するなら

「お父さんもあの人たちに会わせるときに何かを期待していたのかな？」
あの冷たい目線の持ち主に合わせる時に何を思っていたのだろうか？

「わしから言うてもわしの意見じゃがのう…自分の家族に自分の家族を認めてほしいのは当然のことじゃな。詰めが甘いのがのう」

「そっか」

私もその認めてほしい家族だったのだろうか？

「当然じゃろ」

「…変態」

「今か、今言うのか!?先ほどからも読んでおったじゃろうが!」

あたふたする祖父に笑う。欲しかった言葉を言われて照れてるとは言えないじゃないか。

「ふむふむ」

満足そうに頭をなでられたので

「…変態」

今度はいささか本気を込めて言い放ちノックをしてそのまま末の姫のいる部屋に入った。

「こんにちは、末の姫様。お化粧中ですか?」

おばあ様に頬紅を塗られている末の姫に話しかける。退屈していたのかパッと目を輝かせてお化粧を一時中断して此方に来る末の姫。

「そうなのよ。あんまり楽しくないけど海の上に行くために頑張ってるの。…私と違って貴方はとても楽しそうね」

拗ねたようにそう言って私の上がつたままの頬を撫でる末の姫に苦笑する。後ろに居る祖父にばれたのが少しづつが悪い。微笑みあっているとゴホンとせきこむ声が聞こえた。

「仲がよろしいことはもちろん良いのですけれどもこのままでは海の上には行かせられませんよ」

おばあ様の言葉に慌てて頷きもとの位置に座る末の姫にクスクスと笑ってしまふ。

「笑うなんてひどいわ」

憤慨する末の姫にまた笑ってしまふ。

「はいはい、貴方はきちんと前を向きなさい、コラツ頬を膨らませない!」
口をプクツと丸めると怒られた末の姫はいじけている。そんな末の姫を顧みないでおばあ様はさつさとお化粧を再開してしまふ。どんどんと美しくなっていく姿に見惚れながらも子供らしい姿の末の姫にだめるように話す。

「今日は待ちに待った日なのですよね?綺麗に着飾ってお披露目することをお勧めしますよ?きつと空も海もそんな貴方を歓迎します」

その言葉に嘆息をつきつつもまだまだまだ終わりそうにない化粧をするために末の姫は大人しくおばあ様の方を向く。

「そうそう、ちよつと上を向いて。ああ、そこはもう少し上を向きなさい」
私たちが見ている前でだんだんとお化粧が完成していく。お化粧が完成すると白ユリの花冠を末の姫にのせた。その花びらひとつひとつが真珠

を半分にしたものでとても綺麗だった。

「ほら、最後の仕上げですよ」

そう言っておばあ様を取りだしたのは大きな八つの牡蠣だった。おばあ様はその大きな牡蠣を末の姫の尾にしっかりと挟ませた。はさませた瞬間に末の姫は飛び上がって言う。

「まあ、痛いわ！」

泣きそうな末の姫におばあ様はビシリと言う。

「立派になるのですから、少しは我慢しなくてははいけません。牡蠣を尻尾に挟むのは自分の身分を表しているのです、わたくしは十二個、貴女は八個、一般的には六個までが基準なのですよ、名誉に思いなさい」
頬をふくらます末の姫の顔に少し笑んで素直に綺麗な末の姫に賛辞を送る。

「とても綺麗ですよ、末の姫様。まるで末の姫様自体が一つの真珠みたいです」

此方の讃辞におばあ様も鼻を高くしている。

「むう、でも旅人さんがそう言うのでしたらそうなんでしょうね」

機嫌を直してにこにこ鏡を見る人魚姫に褒めて良かったと思う。そうこう見ているうちに末の姫は立ち上がり窓の棧に座りこちらを見た。私が疑問符を浮かべる前に

「行ってまいります」

と元氣よく飛び出して水の中を上にと登って行った。

「あ」

そういやここで出て行くんだったと口を開けて呆ける私におばあ様がどうぞごゆっくりと席を外す。誰もいなくなった部屋で固まっている私に速く追いかけると祖父がせつつく。

「分かってるよ」

慌ててそう言い末の姫が出て行った所から勢いよく飛び出す。急いで追いかけた私が出たときにはもう日は沈み切っていた。末の姫が出たときには海に沈むお日様が見れただるうに残念に思う。人魚姫を見ると浮かんでいる三本マストの大きな船を見ていた。好奇心に駆られてか船室の窓近くに泳いで行く。私たちはとりあえず船からあまり離れないようにして末の姫の動向を観察する。透き通った窓ガラスからは中が見るこ

とができる様で末の姫の目が輝いている。美しく着飾った大勢の人がいるその中でひとときわ目立って美しいのは、大きな黒目がちの目をした若い王子だった。甲板ではダンスが始まりそこに王子が出てくると花火が何百発と上がり昼間の様に外を明るくして、初めて見る末の姫を驚かせていた。見入っている末の姫をおいておき祖父と時間がたつまで話でもしておくことにする。祖父に声をかけようとするのと二ヤリと祖父が笑う。

「さっさと時間を過ぎさせませんか？」

分かって言ってるだろうと思いつつもきちんと言答する。

「話の中だつて知ってるけどさ、人魚姫にとつても大切な時間だ。それを自分の都合で短縮なんてさせないさ」

私の答えに満足したのか打ち上がっている花火の方を向く。

「それにしても、貝の表面綺麗だったね。誰かが磨いたんだろうな、あの光沢は。予想外だったよ」

先ほど見た貝について意見を述べてみる。

「ふむふむ、わしの予想があつとつたの」

「えー元々綺麗だったんじゃないやなくて磨いてあつたの？」

「ある意味権力じゃ」

あほみたいな会話をつづけているといつの間にかかなりの時間が経っていたように色とりどりの提灯の灯は消え、花火も上がらず、祝砲は止んでじつと見上げていた。不意にいままでより船が速度を上げる。帆が一つまた一つと張られていく。ハツとして空を見ると大きな黒雲が押し寄せてきて、遠くでは稲妻が光っている。波が今までより高くうねりとても危険だ。

「嵐になるね」

物語上そうなることは分かっていたのにとでも恐ろしい。

また帆がたたまれた。船はまっすぐ進んでいくのに合わせて末の姫も楽しそうについていく。末の姫にとつてはこれぐらいの波は愉快な波乗りだからだ。それにつられて私は無意識に安心して追いかけていた。

不意に大きな波が来て船が軋んでマストが二つに折れ、船が横倒しになり、末の姫がようやく焦り出す。暗くなり、稲妻で明るくなったと思っ

たとたんに船がまっぶたつに折れた。それをただ呆然と見てみると祖父がもうそろそろ危険だからと海の中に行こうと手を引く。呆然としたまま引かれた方に行こうとした瞬間に船から誰かが落ちるのが見えて無意識にそちらに手を伸ばす。

「危ない」

そう叫んだのはどちらだったか、ゴスリと額に衝撃を受けた。私の体はそのまま海に沈んでいく。上を向いている私に末の姫が王子を助けて上に登っていく所が見えた。ホッとしているとふわりふわりと赤い帯が見える。とてもなんだか既視感……

「馬鹿者が思いが全てじゃと言ったじゃろうが、自分が怪我をしたときや死んでしまう想像を真に脳裏に描いたらどうなるか分からんほど馬鹿でもなかるうが」

押し殺した声を最後に目を閉じた。

Dejavu

既視感

縁 ~ en ~

最近真つ赤なものを見る機会なんてあったのかな？

トマト、リンゴ、ポスト、サンタ、ケチャップ、バラ、イチゴ、夕焼け、火、鳥居、紅葉、南天、カーネーション、梅干し、ザクロ、タコ、彼岸花、ハート、ルビー、金魚、番傘、マフラー、エビ……うーんずれてる。そうだ、あれは信号機、そうそう、それで……車……いや赤くなかったよね？でもその後に見たものがすごく赤かった。そして暖かい。やけに冷えた体。救急車の音、誰かの悲鳴。……血。

あ、ああ……あーあ。思い出した。あの日私はおじいちゃんに家族で会いに行っただ。なぜか発案が弟だった。私は乗り気がしなかった、なんで行きたくなかったんだらう？おじいちゃんとは親しかつたのに。そしてそこで数年ぶりに会ったんだおじいちゃんに、それで一緒に出かけた。渋ってたくせに自分から行きたいって言ったんだっけ。それから事故に遭った。で今に至ると。うわー忘れてたのは私か。おじいちゃんごめん、事故なんかには遭わせてしまって。でも何でおじいちゃんは会ったことを

言わなかったんだらう。事故のことは言いだしにくいのは分かるけど。いや、その前に轢かれたのは私だった、なら何でおじいちゃんここに居るの？不意に訪れた嫌な予感だけは当たって欲しくない。それなのに何故、横からの衝撃にこんなに覚えがあるのだろうか？あのとき車は目の前まで来ていたのに。正面を向いてしまったはずなのに……

「起きろ」

おじいちゃんの声だ。

「起きなさい」

でも本当に私の想像通りだったら？

「起きんか！人を勝手に殺すでない！」

ガバリと身体を持ち上げる。そのまま横に居る人物の襟首をもって揺さぶる。

「生きてるの？本当に生きてるの!？」

返事はない。

「どうして何にも言ってくれないの！さっきは人を殺すなど……」

そこまで言って青ざめる。

「嘘だよね？おじいちゃんは生きてるよね!？」

涙目で手に力を込める私に祖父の手刀が入る。その衝撃に思わず手を放す。

「馬鹿者が……今死にそうじゃ」

ゼーハー言う祖父に謝っておく。返事をしなかったのでは無く出来なかったらしい。

「ゴホン。ふむ、生きとるか死んどるかはおしにも今の所は分からんがのう、わしがそんなことで死ぬような軟弱ものに見えるか？」

一応車に引かれているはずなのに首を振ってしまうのは何でだろう。無駄な説得力があり過ぎる。ホッと息を吐ける。ありがとう。

「ほれほれ、お主が寝ている間に随分と話が進んだぞ」

聞こえているはずなのに返事をしないで動き出す。恥ずかしいから聞こえないふりはありがたい。ありがたいが……やっぱり恥ずかしいのでもいいでも感傷に浸ってないであたりを見回してみる。寝ている間に移動させてくれたらしい海の中だ。でもどうして

「この貝なの？」

昨日寝たベットだった何故わざわざこれ。笑わせたいのか。

「いちいち変なことを気にするでない。話が進んどると言っておろうが」
「はいはい、でも……」

海であることは分かるが海の中であると言っていることしか分からない。しかも今歩いている。横には壁があるがそれしか特徴がない。あれ？壁
「耳をすませてみる」

不意に動きを止めて祖父が言うので大人しく耳をすませる。

「なんの、おまえ、人間だって死ななければならぬのですよ」
おばあ様の声が聞こえた。

「…あ、あー。何してんと言いか人をどこで寝かしていたの!？」
小さく叫んだ後に祖父を問い詰める。移動距離を考えるとどう頑張っても城の二画で野宿している。

「いつまでも起きないお前が悪いんじゃないか」

悪びれずに祖父が言ってくる。確かに起きなかつた私が悪い気がする。でもだ、かなりシリアスな夢を見てたよね！生死の問題だよね!?

私が内心叫んでるのを無視してけろりと祖父がのたまう。

「ほれほれ、ちゃんと聞かんと聞き逃すぞ」

確かに今は話が進行中だ。叫びたいのを我慢して話に耳を澄ます。

「たった一日でも人間になれて、死んだらその天国とやらへ行くことができますなら、私に授かつた何百年と言ふ命だつて、残らず、捨てても惜しいとは思いません」

末の姫の声が聞こえる。おばあ様の言葉をしっかりと聞き逃したらしい。

「そんなこと考えるもんじゃありません。私たちはあの上の世界の人間よりも、ずっと幸せなんですよ」

こうきいてるとただの親子げんかみたいだなとも思えてくる。

「永遠の魂を授かる為の方法は、何も無いのでしょうか。」

「ありませんよ!…けれどもただ一つこういうことがあるんですよ。人間のうち誰かがお前を心から愛してお前に愛を誓ってくれたなら、その時こそ、その人の魂がお前の体にのりうつつて、お前も人間の幸福に与ることができるんだよ」

聞きながらおばあ様が最後に折れると言うのがまた親子っぽいなとも思う。

「おじいちゃんはさ、お母さんとケンカしたことある？」

不意に思いついたことを尋ねてみる。

「あるの。わしもあまり出来た人間ではなかつたからな。いつもばあさんが間に入って止めておつたのう。しかもだいたいの内容がすごくくだらんことじゃつたのう。一度ばあさんを怒らしたことがあつたんじゃがの、その時なんかはそれから半月は二人でばあさんの機嫌を取つておつたわ。それなのに機嫌を直したばあさんがなんて言つたと思つ？」

「何？なんて言つたの？」

「たまには二人に労わつてもらいたいのよ、じゃと。あのときからばあさんだけは敵に回すまいとお前の母さんと誓つたのう」

「へ…それから何週間後に喧嘩したの？」

「残念三日後じゃ」

クスクスと笑いあうと上からまた声がある。

「この海の底では美しいとされている、お前のその魚の尻尾だつて、陸の上では、醜いものと思われているんですからね」

その後すぐに末の姫の溜息が聞こえる。自分の魚の尻尾を見ているのだろう。

「さあ、くよくよしないで」

おばあ様の優しい声が聞こえる。

「私たちに授かつた三百年の一生を楽しく踊つたり、跳ねたりして過ごすことですよ。三百年といえは、ずいぶん長い年月ですもの。その後は、何の未練なく、ゆつくりと休めるといふものです。さあ、今夜は舞踏会を開きましょう」

きつと末の姫を思つての言葉なんだろうけど。

「親の心子知らず子の心親知らずじゃな」

祖父の言葉に思わず頷く。

「所詮人の心は他人には分からないんだから言葉にしなければならぬね」

「喧嘩も大切ということじゃ」

縁 ~ en ~

「三日後に喧嘩した言い訳にはならないけどね」

「五月蠅いわい、お前さんの母親も喧嘩の相手じゃぞ」

「どうせ祖父ちゃんが絡んだんでしょうが」

「うぐ」

やはり当たっていたらしい。

「末の姫もさ、喧嘩すればいいのに、怒られるほど仲がいいのなら、今この時に大喧嘩でもして自分の意見を言えばよかったのに」

いまだに自分の魚の尻尾を見ているだろう末の姫を思っつつぶやく。自分のできないことを人に勧めるのはだめだろうか？自分の後悔を思っって言ってもだめなのだろうか？どうせ進むことなど出来ない物語の中だろうけれども。

「黄昏とらんと今日の舞踏会までどうするか考えんか」

暗くなった顔を見たのか祖父が思考を変えるように言う。

「ん？時間を飛ばさないの？」

時間などすつ飛ばすと考えていた私に祖父は厳かにいう。

「これから待ち受けておるのは魔女じゃぞ」

だからなんだ。…だからなんだ。

「なんで二度言った」

大切だからです。

「そうなのか？…まあ、物語だとなめてかかると痛い目にあうぞ。特に末の姫が去った後はのう」

首を傾げる祖父の後半の言葉が私には意味が分からないがとりあえず頷いておく。それに私は聞きたいことがあったんだ。魔女には。

「というわけで、末の姫がどういう行動をとるか尾行せねばな」

「いや、おじいちゃんが言っちゃダメでしょ。そこはかとなく変態臭がする。」

ロリコン？

「誤解を生むことを言うなーわしはばあさん一筋じゃ」

叫ぶ祖父にやさしい面影が思い浮かぶ。

「そうだね、おばあちゃんのほうが年上だったね」

小さいころに会った記憶がある祖母。祖父が育てていた紫陽花には一家

団欒という意味があったはずだ。その言葉を体現しているみたいに祖母の周りには穏やかな空気があった。祖父と祖母を取り合ったのはいい思い出だ。

「ばあさんは小さい子優先ですとお前ばかり可愛がりおって」

「はいはい、そのあとに大概甘えてくるとはそのおばあちゃん談だよ。」

ぐちぐち言ってくるので言い返すとさすがに真つ赤になって黙った。

「さておばあちゃん談義は置いて末の姫を探さなきゃね」

固まっている祖父を置き去りにして城に入るために城門のほうに向かう。残念ながら城門に着く前に祖父の硬直は止まって追いかけてきたが、青い光を放つ砂から白い城の廊下に変わる。しばらく歩き続ける。周りの変化をみるのが面白く、探索が楽しい、このまま終わらせたくないほどに。庭にはまだ行っていないなと思いい外に出る。

「いない」

無言で歩くこと一、二時間。ついに言葉をもらしてしまふ。庭を散策してまた広間に戻ってきたのに誰もいない。城も庭も無駄に広いとはいえずすがに誰とも会わないのはおかしいんじゃないかと思う。

「おじいちゃん、誰もいないんだけど？」

仕方がないので祖父に聞くが祖父は難しい顔をしたまま此方をみている。

「…そうかいなのか」

少しした後私の方を見たままぼつりと言う。

「うん、いなかったよね？」

変な間が空いていたので不審に思い疑問形で返す。

「そうか…ふむ、では舞踏室に行ってみい」

先ほどまでの重い空気を無視したように軽い口調で言ってくる。

「おじいちゃん、さっきの無駄に難しい顔は何なの」

呆れたように言うときと軽くこちらに返してくる。

「どこにおける確率が高いか探しただけじゃ」

「さいますか」

溜息をついて舞踏室までの数分を歩く。舞踏室では忙しく歩き回る人魚の影がたくさん見える。

「行き違いになったのかな？」

「そうじゃな」

あつさりと返してくる祖父を置いて末の姫を探す。いつの間にか日も沈んでいたらしくもうすぐ舞踏会が始まりそうだ。舞踏室は他と違い全て厚い透き通ったガラス張りで出来ており何百というバラ色や草色の大きな貝殻が、青々と燃える明かりを一つずつ灯して四方の壁にずらりと並んでいた。

「おかしいな、人は兎も角、用意の必要なものなんて先ほど来た時には何もなかったような気がするけど」

まあ一、二時間前だから仕方ないかと思いなおす。

舞踏室に入ると舞踏会が始まったのだろう。人魚の若者や娘が美しい歌を歌いながら踊っていた。

「こんな綺麗な声は、地上の人間は持っていません…か」

ふと眩くと先ほどより綺麗な透き通った声が聞こえてきた。声をたどってみると末の姫が歌っている所だった。曲が終わるととても嬉しそうに顔をしたがすぐに曇ってしまう。末の姫は他の人魚たちの目線がずれた所でお父様のお城をそとと抜け出した。跡を追っていくと自分の小さな花壇にしょぼりと座っている。声をかける前に末の姫は何かを決意したかのように顔を上げた。末の姫はお庭を出るところごとく流れている、渦巻きのように歩きだした。

「…魔法の所に行つてない？」

「そのようじゃのう」

ひれを動かし渦巻きの方こうに消える人魚を見て祖父が頷く。追おうと末の姫が行く方向を向くが祖父に止められる。

「気をつけなさい。自分のイメージした様に物事を動かせるという事は逆に自分が死ぬイメージを抱いた時や混乱して何も考えられん時は危険な状態になる。先ほどお主は流れてきた木片で怪我したのであろう。中におるヒドラにも捕まらんようにするのが一番じゃろ」

「わかった。じいちゃんも気をつけてね」

「ふむ？ああ、わしはどうせ見えんからの。捕まらんぞ？」

「…ねえ、なんかさ、狡くない？」

「ごたごた言つておると末の姫を逃すぞ」

渦の中に落ちていった祖父を追うように進む。ぼっかりと空いた渦の中は何かを飲み込もうとしているようでひどく無気味であった。渦に触れないように慎重に下に落ちていく。下には灰色の砂地が見える。

「あれ？」

灰色の砂地があるだけだった。一面の砂地で他に何も無い。もちろんヒドラも人魚も魔法の家も。いや、よく見ると遠くの方に人影が見える。それが何故かむしように焦りと寂寥感と諦めを生む。そしてここに来た時に感じた苦みを覚えひどく恐い。

「おじいちゃん」

焦りに祖父の名を呼んで探す。すぐそこに祖父はいた。ぼつりと何かをつぶやいた気がしたが此方の声にハツとしたように振り向く。そして深い溜息を吐いてそういうことかと眩いて此方に寄つて来た。

「何が見える？」

祖父にそう聞かれて人影が見えるとだけ答える。祖父はまたそうかとだけ答えて私の手を引き歩きた。まっすぐにただ前だけを見て。

「おじいちゃん！そっちは人影が見える方向だよ。…そっちに行くのは怖い」

怖いなら歩くのをやめればいい。しかし私は手を引かれているのだから歩かなければならぬとどこか自分に言い訳をしながら足を止めることなくしかし恐怖にかられてぼつりとこぼす。祖父はこちらを見ることはせずに訊く。

「何故怖いか分かるか？」

私は黙って首を振る。そんなことしても見えないが、私の心が聞こえたのだろうか、それとも最初から答えなど必要としていなかったのか話し出す。

「だいたい何を見ているか分からんでもないがのう。まあ、恐怖なんぞ自分で確認したくなんぞないか。意地の悪い所じゃな」

祖父の言っていることが脳に届かない。けれど私はそれにまた頷く。結局私は分かっているのだろうか。あれが何なのかを…でなければこれほど

恐ろしくない。

サクサクと灰色の砂を踏みながら歩いていると時間の感覚が麻痺していく。最早私は何をしようとしたのか分からないくらいに。時間がたつても相変わらず祖父は前を向き私は下を向いて歩く。一分か一時間か。しかし、又突然に終わりが見える。

「家じゃな」

祖父の眩きに私は思わず顔を上げるが、そこにはもう人影はなかった。そのことが不思議と寂しかった。

首を振って心を入れ替える。知りたいのはそんなことではなくて帰り道だ。

「そう言えば何すればいいんだっけ」

「ふむ、会話を楽しんで来ればいいじゃないか」

「この空間を用意するような人と？」

「訊きたいこともあるんじゃない？」

「…そうだね」

頷いて歩き出す。今度は前を向いて。

「わしは行かんからのう、ゆっくりしてこい」

「え？なんで？」

「ここは魔女の家じゃからのう、歓迎されてないじゃろ、おそろくもう物語から外れた場になっておるじゃろうしな」

最後の方の意味は分からなかったが必要なことなのだろうと一人で小屋に入っていく。扉の閉まる音と共に祖父は見えなくなった。

「こんにちわ」

ノックと共に入り、恐る恐る振り返ってからであるがきちんと挨拶をする。

「おや、珍しいね。此処にあの子以外が来るなんて、いや初めてのことかねえ」

快拳だねえと笑う魔女を見る。意外なほど普通のお姉さんだった。魔女服の。

「貴女が魔女さんですか？」

「魔女だねえ。それにしてもよく来たね、お前さんに怖いものがないの

かい…いや違うね、あんたにはとても恐ろしいものがあるねえ」
笑ったまま此方を見る魔女の目はとても真剣で刺すようなまなざしを感じる。

「私の祖父がここまで手を引いてきてくれたのです。此処はどのような仕掛けが施されているのですか？」

あの影の正体が分かるのではないかと思いつく。

「ふーん、あんたの祖父がねえ、結構結構、恐怖を克服したのねえ、素晴らしい！」

此方の意見を聞かずに続ける。魔女には何か別の答えが映っているのだろう。

「そうそう、ここにはどんな仕掛けが施されているかだったね、単純明快さ。恐怖を体験するだけさ。本当に怖いものがまだわかってない末の人魚姫には此処があのお年寄りの言う通りの場所に映っていたらどうけ

だねえ。あんたには何が映って見えたのか聞かせてくれないかい？」
楽しそうに歌うように訊いてくる魔女に先ほど見たことを言う。逆らう

ことは良くないと本能的に感じる相手だ。

「ふーん、あんたにはそれが何か分からなかったと。一つ聞いてもいいかい？」

どうぞと先を進める。来る前に感じていた恐ろしさは消え、自分のことについて占ってもらっている感覚を思い起こす。だからこそその恐怖もまた消えたわけではないが。

「ここまで来るときに不可思議に感じたことはないかい。何か立ちふさがった、あるべきものがなかった、急に眠たくなったとかかねえ。なかったかい？」

特になかったと答えようとして思いつく。

「祖父がこの夢の中で睡眠をとることを進めてきました。後は…先ほど末の姫を探すときに舞踏室に最初に行ったときには何もなかったのに急に多くのものが出てきました。」

いくつか思いついたことを言ってみる。

「ふーん、寝台の形は貝殻だつてりしてねえ」

何気なく魔女が言う。

でいる末の姫の姿が映っていた。

「ハハハ、可愛いねえ。決して魚のお嬢さんの思う通りの想いで差し出されたわけではないのに：ねえ」

私の服のレースを引つ張りながら言う。

「喜べないよりかは、いいのかねえ」

楽しそうに紡ぐ言葉に私が口を開こうとするが魔女に遮られる。

「どうせなんだからすべて吐き出していきな。ああ、言っとくけど私にじゃなくあなたの祖父によ」

言われて今度こそ外に放り出された。外では恐怖がまだ続いているのかそれでも逃げずに響め面のままで待っていた祖父がいた。

「御苦労さんじゃの」

さすがに少し憔悴した感じを出しているが此方に気付くと笑顔で言う。

「どうじゃった？」

さすがに人の心を読んてるほどの余裕はなかったらしい。

「…歩きながらから話そうよ」

私は祖父と違つて此処に長時間いれるほど図太くない。

「そうじゃな」

各いう祖父も長時間いたいわけではないようだが。

歩きながら必要最低限のことを話す。そして最後に魔女に言われた服の話を。

「私さ、末の姫に宝物つて言つたじゃない、この服の事。でも本当はそんなこと私は思えてなかったんだよね」

自嘲しながら言う私を祖父は黙つて見ながら歩く。

「今日はお父さんの所のお祖父ちゃんの家に行くからこの服を着てくれるか？この前、姉さんにお母さんが服のことを言われていたから：すまないが頼む。」

「…ひどいよ、嬉しかったのに。お父さんの馬鹿。なんでこんなフリルの…私には似合わないのがわからないの？私はシンプルなのが…でも…その服装で言われたんだっけ、厭味。つでもどうせ、どんな姿でも文句言つて来るじゃない」

「女の子なんだから」

そう言われた私の気持ちは？

泣きそうな私に祖父が言う。

「…お前さんの父親がわしの娘に送つた初めての服どんなのか知つてるか？」

私は首を振る。

「でも、母はいつでもひらひらしてないシンプルでも可愛い服を着ているよ。スカートが多いけど。お父さんからのプレゼントだつてあつた。」

思い出しながら反論してみる。

「あれは、折衷案じゃ」

「お前さんの父親は可愛らしいものが好きでこのう。逆にわしに似たお前のお母さんは無地やズボンなんかを好んでいたんじゃよ。大喧嘩してのう。それで今の形状に至るとなるんじゃ。じゃからお前さんを思つてその服を買つたことに嘘はないんじゃぞ」

その言葉に涙がこぼれそうになる。

「喜べなかつた私が悪いのかな？」

しかし祖父はそれにも首を振る。

「きちんと伝えんあの大バカ者たちが悪い」

清々しいほどに断言した言葉に吹き出す。

「フハッ：そうかもしれないね。…あれ？でもこの服は初めて貰つた服で今着れるはずがないのに：」

きちんと服の中に納まっている自分の体を見る。

「だから最初に言うたじゃろう。お前さんが何歳に見えるか。しかし、余程その服のことが気がかりじゃつたんじゃろうな服自体も少し大きめに变化しておるの。それにその姿は帰りたくないと言うお前さんの思いでもあるからのう。時間を進めたくないと言うお主ののう。」

ついその言葉に俯いてしまう。

「でももうそろそろそれも限界じゃな、きちんと選ばんどのう。あの末の姫も選んだんじゃ。そしてお前たちは形は違えど同じ選択をしたのじゃから。そこまでいくかのう。」

そう言うとおじいちゃんはそこに道でもあるかのように垂直に歩いてい

く海上に向けて。

海上にでると一艘の船が浮かんでいた。音楽が流れ、人々がダンスを踊っている。

「末の姫には悪いがとばしてもらったわい。もうすぐ限界も訪れることじゃしな。誰のためでもなく自分のためであるが、故郷を捨て、美しい声を捨て、毎日、苦しんできた姫のためにこの一晚はとばさんでおったがのう。苦しいだけかも知れんが、日がさす前に姉姫たちも来よう」甲板では末の姫が踊る姿が見える。その視線の先では王子が美しい花嫁にキスをし、花嫁は王子の黒髪をなでていた。

そんな末の姫をおいて宴は進む。次第に夜が更けて行き、人の気配も消えた。東の空が赤らんでくるのが見える。誰もいない船の上では末の姫が手すりにつかまり東の空を見ている。

そしてふと何かに気が付いたように海の方を見ると姉姫たちが末の姫と同じくらい青ざめて末の姫の方を見ている。太陽が昇れば末の姫はもうこの世界のどこにもいないことが分かつているのだらう。長い髪を対価にした姉姫たちが王子を殺して欲しいと嘆願しに来たのだ。短刀を渡すと姉姫たちは海に沈んで言った。静かに末の姫は王子の寝所まで行く。人魚姫の手の中で短刀が揺れる。

「じゃが、姫は短刀を捨てるのう」

祖父の声と共に水の中に何かが沈む音が響いた。そして大きな音が響く。末の姫が飛び込んだのだらう。

「同じように殺さんかったんじやの」

その言葉で強く弟を思い出す。ふらりと動く脳裏に病室が映る。

「もう夢と現があいまいになってきておるからのう。末の姫や、もう少し待てるか？」

祖父が空に向けて問う。

「もちろんよ。私達の大切な人の為なんだから。」

末の姫と祖父の声がどこか遠い。

誰かが扉を開けて中に入ってくる。その人以外まだ誰も来ていない。

「おかしいな。お父さんとお母さんが先に来ているはずなのに」

そう呟きつつ弟は静かにベットに近寄り目を閉じて姉にそっと弟は声をかける。

「…僕はいまだによくわからないんだ。あの時貴方が言ったことが、貴方のせいで僕は貴方を何とも呼べない。約束守るから守ってよ」

他の誰が聞いても分からない小さな愚痴を弟は親戚の家で言われたことを思い出して言う。姉からの答えは当たり前のようになかった。

「かくれんぼのことだって本当は知っているんだ。でも僕にできる事は親戚を一手に引き受ける事ぐらいなんだよ。悔やんでもまた同じことを繰り返すしかないことを知っているけど。貴女はこんな僕でも嫌いなならないでいてくれるのね。本当に嫌われないかどうかなんてわからないけど、きつと嫌われないよね。誰よりもじぶんが嫌いな貴女は他人を憎まないだらう。むしろ憎めないようにあいつらがしたというべきか。お父さんとお母さんの馬鹿、どうしてあいつらなんかを優先してこの人を大切にしないの？…ねえ、迷惑かな僕が貴女を…呼ぶことは」寝ている姉からは否定は返されないしかし肯定も返されない。きつと目を覚まして意味が分からない言葉の羅列だらうけど。

「あのさ僕さ、昔大切な夢を見たんだよ。知ってる？あの時の夢だよ。

その夢みたいにさ、家族そろってコタツを囲むんだ。お父さんとお母さん、おじいちゃんがやって来て場所がなくなるから貴女は隣に僕を入れてくれたんだ。それで絵本を読んでもくれるんだ。どれがいい？と僕に訊いてくれる。僕が決めかねていると、お父さんが幸せな王子はどうだつて言ってきたお母さんがあら、ここは人魚姫でしょって。おじいちゃんがそれならとかいつて難しそうな本を取り出すんだ。貴女は僕には難しいからダメだよってやんわり止めに入る。それで僕は人魚姫を読むことに決めるんだ。だつて貴女がとても大切にしてた本だから、貴女と家族、僕にとつても大切な一冊だから。じいちゃんが何故か魔女役で、他の文と主役を貴女が兼任して読むんだ。読み終えたらたくさん本から、次の本を読もうってまたみんなでおす。貴女は大切に人魚姫の本をしまつてから話に加わるんだ。どうしても決まらなくてその時はお母さんとお父さんがじゃんけんで勝敗を決める。どっちが勝つたのかな？…あの本どうしたの？あんなに大切にしていたのに…それとね…起きた

時に見えたのはお姉ちゃんの後姿だったけど声は聞こえたんだ、お願いだからさ、貴女がいらないことを祈らないで。この家族には貴女を含めた全員が必要だってどうして分かってくれないの？

：愚痴になっちゃったね。眠気覚ましに何か買ってくるよ。大丈夫だよ。お父さんからお小遣いもらってるから、なんてね。：目を開いて欲しいな。守れる力はまだ全然ないけど。

唐突に接続が切れたように景色が船の上に切り替わる。

「…今のは？」

呆然とつぶやく私に祖父が答えてくれる。

「夢が繋がったようじゃな。今がとても不安定じゃから。強い思いは繋がったんじゃない。選ぶお前さんに此方を選んで欲しいという思いじゃろうな」

縁 ～ en ～

「：見事に色々ばれてたような。と言うか覚えてたんだあの夢も約束も。覚えていてくれたんだね。：あーもう、それにしても人魚姫。確かにこの本は私が持ってた。：本を手放してしまった理由も思い出した。馬鹿だし：馬鹿だな。」

泣きそうな声で言う。

「嬉しそうじゃの」

泣きそうな私の方を見て言う。

「だって、でも、いなくていいと思ったのは本当なのに。色々ばれてるうえに聞こえてたなんて」

ああ、と苦悶する私に祖父が声をかける。

「素直に弟に気付いてもらえて嬉しうと言ったらどうじゃ。」

ぐっと詰まってから悪態をつく。

「どっちにしろ、悪質だけどね。他人の心を覗き見なんて。あいつだって絶対に聞こえてないと思いながら喋ってたよ。」

ぶつぶつ言う私をおいて祖父は空気の精となった末の姫に声をかける。

「またせたのう」

「本当にね」

悪びれずに返す末の姫は続ける。

「人魚姫のお話はここで終わり！私は空気の精になり3百年の修行の旅に出る：ことなく繰り返すけどね。ふふ、でも気付いてた？この物語は：今回の物語はあなたが主人公なのよ。そういう意味では繰り返してないけどね。最初で最後。私たちを大切にしてくれた貴女だからこそ幸せになって欲しいのよ。ね、私たちの持ち主さん？：ほらさっさと返して」

急かされて祖父が取り出したのはあのときに破かれたはずのコバルトブルーの本だった。：思い出した、裏の森に入るときの他に祖父が忠告してきたのは：この本を祖父の庭に箱に詰めて埋めたときだ。その時に真剣な顔で忠告されたんだ。本当にいいのかと。

「あの時、お前さんの壊れかけた笑顔を見て一度放した方がいいと思うて止めなかったんじゃない。本物はまた目覚めたら渡すがのう」

「最後は余計よ」

祖父の声に被せて末の姫が言う。

「後、私は故郷も宝物も捨てた人魚姫よ。あの優しかったおばあ様や姉君たち。お父様、宝物の大理石。全て詰まった故郷を私が捨てたのよ。大切にされていたあの末の姫でなく、王子が知らない人魚であるという事を冠した人魚姫よ。気付いていたかは分からないけど貴女は私に末の姫としか言わなかったわ。私にはもうそんな選択肢はないの。あるのは貴女よ。間違わないで：その言葉で呼ばないで」

淡々と告げる。でも、とまた明るい声を出す。

「貴女は帰れる。まだ選択できる。貴女はどうするの？帰るの帰らないの？言っとくけど帰らないことは死を意味するわよ。」

余りにも率直と言えは率直な意見に祖父が口を出そうとするがそれよりも前に言う。

「だいたい分かってました。魔女さんもそんなこと言ってましたし、おじいちゃんは異様に過保護ですし、自分が生きてる事はほのめかしていましたが私については言及しませんでしたから。危ないのは私の方なんだから。このまま消えることも出来る。これは魅力的で私の悩みをなくしてくれる、でも：それでも帰るよ」

あつさり言った私に祖父が此方を見て口をバクバクさせている。

「何さおじいちゃん。私がこのまま消えると思ってるの？私は生きて家

族と話さなくちゃいけないもの。楽な方には逃げてちゃだめでしょう。生きるか死ぬかはその後を考えます。魔女さんの誘いは魅力的なんですけどね」

祖父をおいて私と人魚姫の話は続く。

「あらあら、そんなに即決するとは思わなかったわ」

「そうですね、私も不思議です」

とても迷うと思っていた。むしろあの暗い空間できかれていたら帰らないことを選んだだろう。

目を伏せた私に人魚姫が言う。

「あのね：私に居て欲しかった人たちは私が裏切ったの。その選択を貴女に私が選んで欲しくなかったのよ。押し付けだと分かっていても。その為に色々用意してたのよ？ 選択をした後だけと聞いて欲しいと思うわ」

そう言って海の方を指す。そこには姉姫達とおばあ様、王様がいた。

「馬鹿ね、裏切られたなんて思っただけよ」

一番目の姉姫が言う。

「でも、ぜひ聞いて欲しいわ。これはまぎれもない本心だから、貴女のことを思う両親の」

こほん姉姫がせきをする。

「子供が、待望の第一子が生まれた。とても嬉しい。同じ漢字をもって男の子の名と女の子の名を候補に挙げていたの。私的には男の子の名の方がカッコいいなと思ってたから少し残念。色々な物事と巡り合い成長してほしいと思ってつけたわ。その縁が悪ければ守り、良い縁なら一緒に大切にしていこうと思っただけ。夫と共につけたの。私は次は男の子がほしいねとこの子に家族を増やそうって言って夫と共に笑っていたの。私たちこそが悪い縁になってしまわなくてね」

お母さんの声だった。思わず身を乗り出す。

「あの子が生まれて4、5年たつてくると親戚がうるさくなってきた。女の子じゃねーとか聞えよがしに。妻がとても疲弊していくのが分かってた。妻に付き添い周りから守るのに必死になって忘れていたんだその震える小さな姿を。子供だから何ひとつ分らないなんてそんなこと

あるわけがないのにその震える姿をあんなに敵がいる所に一人にしてしまったんだ。妻と共に守るべき存在であると、つけた名に誓ったのに」
今度はお父さんの声がする。発したのは二番目の姉姫だった。今度は三番目の姉姫が口を開く。お母さんの声で

「やっとできた男の子の名前をお姉ちゃんとお父さんになるようにしたわ。とても嬉しくて夫と共に笑っていた時にやっと気付いた。輪から少し外れるように佇むあの子に。私は初めどうしたのかと思っただけで落ちたように聞いてみたの。とても嬉しそうにでも少しさびしそうに落として。あの時引きとめていたらもう少し変わったかしら。こんなに深く変わった溝に気付く前に修復できていたのかしら」

何も言わずにいる私に声は続く。四番目の姉姫が口を開くお父さんの声で

「あの子が少しギクシヤクしているのに気付いたんだ。弟が出来て緊張しているのかと気にも留めなかった。弟が出来たくらいで顔をこわばらせるわけ無いのにな。息子が出来てから妻への圧力は減り和やかに進んでいたんだ。そりゃそうだ、だれもあの子を呼ばないし話にも挙げない。あの子はあのと時何をしていたんだろうか」

五番目の姉姫が口を開く。お母さんと無意識に呟く。

「久しぶりに祖父に会うって言った時あの子の笑顔を、柔らかい笑顔を久しぶりに見たわ。笑顔なんて毎日見ているのに。あんな柔らかい笑顔なんていつ振りかきさかのぼったら三年前で途切れていたわ。祖父に会いに行かなくなつたのも三年前。笑えちゃう事に全て横顔で、そういえば昨日あの子何してたかしらなんて、そんなに祖父と親しかったかしらなんて、何一つ文句言わずに祖父と会わなくなったのね。祖父と会ったら、外出しようってねだっている所を聞いて耳を疑ったわ、私たちに話しかけるのは敬語なのね」

終わりにかと思うとおばあ様が口を開く。

「祖父と出かけていく後姿を見送って妻に話しかけた。敬語じゃなかったな。妻はそうねと答える。そういえば親戚に答えているときに随分と拙い敬語を使っていたなと思いだした。母を守ろうとしているのかと

縁 ~ en ~

思はずいぶんと微笑ましかつた。今思うと言葉が拙いうちから敬語を喋らなければならぬなんて使えるまでの経緯を考えると全然笑えないが、不意に妻が言う。弟が生まれた時は敬語じゃなかったわねといった。まだあのときは私たちに対して敬語ではなかったんだ。いつから…たしかあれは弟の5歳の誕生日が終わった頃だったな。ああ、そういえばギクシヤクしているのがとけた時だったな。」

王様が今度は口を開く

「私たちは知らないうちに随分とあの子を傷つけていたのね。知ってる？ 童話では登場人物に名前なんて無いのよ。気付いてる？ 私たちは今日一度でもこの子の名を呼んでないの。病室で眠るこの子の名を。これで親だなんて…わらえもしないわね」

お母さんの言葉に口を開くが声が出ない。王様がそのまま続きを話す様に幼い声でしゃべる。

「呼んだらいいんだよ。お母さんもお父さんも遠慮のし過ぎだから。きつともうすぐ目覚めてくるこの人に全て聞けばいいよ。僕ももうそろそろ呼びたいから。約束を解かなきゃ。起きてよ…ねえ」

声はそのまま終わる。

「速く行ってやらんか」

ぼろぼろとおちる涙のせいで答えられない。

どうすればいいか分からない。帰り方が分からない。声の代わりに心で叫ぶ。

祖父はやれやれと小さな子供に言うように丁寧な答える。

「起きようと思えばいつでも起きれるんじゃない。この物語はお前に選択肢を増やすために在ったのじゃからのう。わしが物語の登場が終わったものには見えんのはわしが物語に不必要な人間だからじゃ。何より強く願いなさい。帰りたいと。決して、帰らなくてはならない何かではなくてのう」

魔法さんの所で言った言葉にびくりとする。聞こえてなかったのではと疑問がよぎる私に祖父はふんつと鼻を鳴らす。

「お前さんの思いそんなことくらいわかるわい…一足先に行くぞ。お前さんの帰りを皆で待って置いてやるわい」

そう笑って祖父の姿が消えた。私に声を伝えてくれた人魚たちは後は君次第だとも言うように海の中に消えていく。最後に残った人魚姫がぼつりともらす。

「もう、忘れないでね。私たちはあなたの大切な記憶なんだから。私たちは私たちを大切に何度も読んでくれたあなたが大好きよ。私たちが味方なんだから要らないなんて言わないでね。少なくとも私たちには貴女が必要なんだから。私たちの存在を否定することは許さなくてよ？ 帰ったら言い合いなさいな。私には出来なかったけど。喧嘩しても結構。人に頼ることを覚えて頑張んなさい。誰が何と言おうと私達は貴女の味方なんだから」

その前に帰れないかもしれないと自分のはつきりと見える手を見て思う。俯く私に人魚姫は続ける。

「何？ 帰れない？ 帰らなくてはならない？ 帰りたい？ そうじゃないわ。帰るのよ。あなたが帰らなかつたら誰が私たちの話を読むのよ。大義名分なんて私たちが考えてあげるわ。何も考えないでいいのよ。願え！ 私達が叶えてあげるわ」

につこり笑って人魚姫も空の上に消え、コバルトブルーの本だけが残った。偉そうに笑う人魚姫に笑ってしまふ。

「そうだね、私の味方がいるのだから何より強い。私の大切な貴女達が。生まれた時に両親が送ってくれた貴女達が。否定なんて出来るわけじゃない。頼もしくないわけがないじゃない。貴女たちが叶えてくれるのに帰れないわけがない。ありがとう人魚姫」

静かに私は本を開く。

思えばあのときから分かり切っていたんだ。疎まれていることなど。

お父さんの実家では男の子が欲しかったらしい。女の子の価値が異様に低い家だった。だから伯母さんもやけに卑屈でお父さんを大切にしていた。お母さんが一緒に来ているのに無視か嫌味。祖父は存在すらどうでもいいように視界にも入れない。祖母は母に厭味を言っていた。それは私が生まれてから余計に顕著になった。子供は夫婦の問題なのに。男の子が生まれるかどうかなんて誰にも分からないの。お父さんはそんな

家でお母さんを一人にしておけないってずっと付き添っていた。標的が変わることなんて分かり切っていたけどお母さんを守ることに必死になつて気付かない。でも私からお父さんに助けてなんて言えなかった。それは薄情だけとお母さんが大切なんて理由でなくて、お父さんにそのまま無視され続けたらそれは自分が必要でないという証明になるから…。だからこの距離がちょうどいい。本当は分かっているけど。だって、もういつても同然なんだよ。私を忘れている時点で、でも言葉でできなくないんだよ。ねえお父さん、私はここにいますよ。

弟が生まれた。正直、嬉しいという気持ちよりも安堵したという気持ちの方が強かった。でも、まさか罵倒が恋しいと思うなんて思わなかった。罵倒されている時ならお母さんを守るためっていういいわけがあったもの。もう私の存在はないらしい。あれほどそれを証明されるのが怖かったのに。だから誰にも会わないように隠れた。隠れているのに探しても見えない。分かっていたけど。だから弟が見つけてくれたときは嬉しかった。かくれんぼ僕もしたいと言われたときはとても困ったけど。弟といると見つけてほしくない人に見つかる可能性の方が高いから。だから一つの約束をした。まあそれと引き換えに姉と呼ばないこととこの家では見つけても言わないことを約束させたんだけど。先に私が約束を破っちゃうなんて思いもなかった。

弟の五歳の誕生日。お祝いしたかったけど出てもいけないしどうしたのかと悩んでいた時にざりつと砂利を踏みしめる音がした。弟が抜け出してきたのかと思つて注意しようと顔をあげて後悔したよ。醜悪そのものの笑いを湛えた伯母の一人息子が立っていたから。自分の親が自分よりあの子を優先させるのがよっぽど嫌だったみたい。私が暇をつぶすために読んでいたあの童話をー私の宝をービリビリに破いた。声一つ上げることが出来なかった。伯母の息子はそのとき始終笑顔だった。それで私に言うのお前よりはましだつて親に気付かれもしていないお前よりましだつて。そう言い放つて伯母がその息子を呼ぶ声を聞いて立ち去った。私を呼ぶ声はしなかった。絵本のかけらを一枚ずつ拾っていくごとに私の中の何かが壊れていくようで拾いたくなくてでもこの中に私の宝物をおいていくことはどうしても嫌で。なら私の中の何かが入ったこの絵

本はおじいちゃん家に捨てて来ようって思ったの。もちろんこんな鬼がいる家でなくとも意地悪でも温かいあのおじいちゃんの家を捨てて来よう。だれにも見つからないように。

これで弟としたたつた一つの約束が守れなくなることは分かっていたんだけどね。絵本を読んであげるって言ったたつた一つの約束。この絵本がー

「急に伯母さんから電話がかかってきたの、別に行事ごとでもないし行きたくなかつたら行かなくてもいいわよ？お留守番してる？」
ー私の誕生日すら忘れてしまった両親とのつながりだったのに。

目を覚ますと病室だった。節々がやけに痛い。

「ああ、一応車に轢かれたんだっけ」

ぼんやりとそんなことを思つてしまう。生死の境をさまよつたという事は頭を強く打つたのだから他の外傷は意外にも軽微だ。カーテンが引かれており横には三、四人の人影が言える。開ける度胸はなかつたので懸念事項を聞いてみる。

「おじいちゃんもしかしてきていましたか？もしかして伝えちゃいました…」

起きる前に見ていたことを思い出す。祖父は先に帰つたはずだから見えないはずであるが。

「ごめん、ごめんなさいゆかり」

「すまないゆかり」

帰つて来たのは両親の謝罪だった。その後ろで祖父が頷いていると言う事はそうなのだろう。ちがうそう言つて欲しいんじゃない。私は…

ー頑張んなさい。誰が何と言おうと私達は貴女の味方なんだから

「私は…誕生日覚えていて欲しかった。親戚の家に行くことに変わりはなくとも。一言祝つて欲しかった。私の存在を認めて欲しかった。名前が呼ばれなくても、誰も見つけてくれなくても、たつた一言があるうちはまだ、私の存在が二人の中にあると思えていたから。本当かなんて関係ない。私がそう思つていたから。誰でもなく私のために言つて欲しかった。こんなことエゴの塊かもしれない。けど私がこの本をなくした日に

縁 ～ en ～

私が私の中で消えたようにもうとつくに二人の中からは消えてた。私がそう判断した。そう判断したのは二人の行動のせいだよ。そう：思ってた。人魚姫が私の思いを全否定して、私を受け止めてくれなかったら私はいつか二人を恨んでた。そう、恨んでいたんだよ

：でもね全て過去形でもある。私は心の拠り所が戻ってきた。私が欲しいのはいつだって一つだよ。そんな謝罪が欲しいわけじゃない！それに謝るのは私の方だ：でも謝らないよ。どちらかが悪いわけではないんだから：」

敬語なんて思いだしている暇もなく私は感情のまましゃべった。

「：許可が欲しいな」

ふと弟が言う。それはいつかの約束を壊すもので、でもほわりと心がうかぶ。

「そうだね：でも許可なんかじゃない。私が言っただけだよ。待たせてごめん、お姉ちゃんと呼んでください。：約束を破った代わりにどんな本でも読んであげるから」

「ゆかりお姉ちゃん、おかえり：ならあの本を読んでほしい」

その言葉は謝罪でなく、私の欲しい言葉で私の居場所を示してくれる言葉で、泣きそうな笑顔で弟に返事を返す。

「ただいま、えにし：あ、でもあの絵本は：手元になくて」

そんな私たちを見ていた祖父が私に一冊の本を渡してくれる。あの夢で見た本とは違いポロポロでそこかしこに不格好なセロハンテープでつなぎ合わせてある、コバルトブルーの本。

「：持っていてくれたんだ」

「あたりまえじゃろうが、渡すといつたろ？」

「ありがとう。えにし、たくさん読んであげる」

笑いかけると笑い返してくれる。二人して笑っているとまごまごしている両親を祖父が怒った。

「帰って来た者に何を言う言葉すら忘れてしまったのか？情けない。子供を見習え！お前たちに足りないのは遠慮のなさじゃと言うたじゃろうが」

両親に祖父の一喝が飛ぶ。ハツとしたように私の顔を見て笑顔で言う。

「おかえりなさい、ゆかり」

両親の言葉に一筋涙がこぼれる。

「ただいま帰りました」

：笑顔で答えたのに両親が沈む。嬉し涙だからと言おうかとまごつく私の耳元で弟がぼそりと言う。

「ただいま」

数秒考えてから急いで復唱する。

「ただいま。お父さんお母さん」

「これからは敬語を抜く様に頑張らんな」

すぐに祖父にも諭された。

「これからは何でも言ってくれ」

「遠慮はしないで」

両親の声にまた泣きそうになる。慌てて涙がこぼれないように目を閉じる。

「うん：うん。ありがとう」

そう言っただけで笑うと。ガシャリと音がしてふわりと暖かくなった。カーテンを開いて抱きしめてくれたらしい。

この後にナースさんが来て私起きていることに気付くすぐにナースコールを押さなかったことを怒られたのは余談だが。

エピソード

あの事故から二カ月ほど過ぎた。

お父さんは自分の家族とまだ抗戦中。私のために戦うお父さんを見るのは辛い。でもそんな私に気付くと抱きしめて言ってくれる。

「これはゆかりのためであるけど、自分のためであるんだよ。自分の犯してしまった罪が一瞬で片付くなんて思っていない。それにいつだって私にはゆかり達がいるだろう？」

辛くないはずなのに：私はお父さんに自分のもう一つの家族と戦えと言ってしまった。お父さんだけじゃないお母さんはそんなお父さんの

家族にまた嫌味を言われている。弟は優しくしてくれていたことに変わ
りないお父さんの家族とほぼ会わなくなった。

それでも自分勝手な私は思ってしまった。前の関係には戻りたくない
と、今を大切にしたいと思ってしまう。私の都合で傷つけてくれる家族を嬉
しく思ってしまうんだ。

だから人魚姫、私は宣言するよ。

そんなことを思いながらぼんやりと空を見ている私を不審に思ったのか
弟が不思議そうに訊いてくる。

「何してるのお姉ちゃん？」

「…んー！決意表明？」

私が今考えていたことを一言で言ってみる。

「…何してるのお姉ちゃん」

今度は呆れがちに言ってくる。弟とはとても仲良し…か？

まあ、言いたいことを言い合える。

お父さんとお母さんとはまだぎこちない。

それでも、敬語にならないよう心がけている。鋭意万進中だ。

「そんな変なことしてないでさ、おじいちゃんがきたよ」

弟の幾分失礼な言葉に振り向くが動くことはない。

おじいちゃんはこっちにちよくちよく来るようになった。

その祖父が何故か弟ととても仲が良い。

「そっついえはさ、おじいちゃんといつ連絡とってたの？」

動かないまま訊いてみる。

「ん？内緒。」

たまに弟がつれない。

ちよっと、そう少しだけ寂しいのでちよっかいをかけておこう。

「お…重いよ。お姉ちゃん」

ガバリと抱きついて押し潰すと息も絶え絶えに言ってくる。そんな弟に
フツと笑う。

「弟よ、いいことを教えあげよう。…レデイに向かつて重い禁句なの
だよ」

その言葉に諦めたのか弟は下でバタリと動かなくなった。

ついでに今の格好はスカートでなく、ズボンを履いている。シンプルな
格好。

お父さんが自分のしたことを反省して買ってくれた。選んだのはお母さ
んだ。センスが良い。お父さんは前の服を捨てようとしたけど、一着
あの時来ていたものは残してもらった。さすがに着れないものだが、こ
れも大切な思い出。お父さん的には可愛い服をきて欲しいらしくちよ
いちよい勧めてくる。まあ、だからこの服を選んだのはお母さんなんだ
けど。お父さんが本当に私の事を考えて買ってくれたこともわかりとて
も嬉しい。…着る着ないは私の勝手だと宣言しておこう。

「ゆかりー、えにしー。ご飯よー」

お母さんの声が聞こえる。

「はーいー」

私は元氣よく返事をする。きつと祖父も、座っていることだろう。

おばあちゃんが育てていたという紫陽花のことでも話してみようか。

きつとお父さんもお母さんも見に行こうと言ってくれるはずだから。

またボケつとしたらしく、いつまでも返事したまま来ない私達をお父さ
んが迎えに来る。ついでに弟は動きたくても動けない。

「…何してるんだ？ゆかり？」

私の下にまだいるからね。

お父さんが私を持ち上げる。やつと弟がでってくる。やはり虫の息だ。

私がしたことは棚に上げておいて弟に手を伸ばす。恨めしげにしている
が私の手を取って立ちあがる。弟を立ち上げながらお父さんに声を
かける。

「今日のご飯はなんで…なにかな？」

…まだ、ちよっと変だが、これからだと言いたい。声をかけてみたもの
の見事に失敗した私に弟が手を引いて耳打ちする。

「今日のご飯何？」

復唱するとお父さんは笑って答える。

「とあっ」

首を傾げられたので傾げ返す。今日はみんなつれない。行けば分かるか
と思いきりビンゴへと行く。やはり祖父はここにいたらしい。炬燵でぬく

ぬくしている祖父がいる。やけに豪華な食卓だ。祖父が来たからかもしれない。やたらと父が張り切るので母も頑張るのだ。

「いただきます」

皆で揃う。これから続けて行く日々で、私のせいで今までなかったもの。目を細めるといち早く気づく祖父が声をかける。

「お前のおかげで完成したものでもあるがのう」

…たまに読心術はあの空間だからでなく、祖父だから出来たのでないかと思う。

「おじいちゃん、なんでそんなにえにしと仲いいの？何処かであつた？」

弟にきいた言葉を祖父にも聞いてみる。

「内緒じゃよ」

案の定、弟と一緒に答えが返ってきた。でも、それでいいのかもしれない。あの時、私がああ空間に落ちる前に聞いた、祖父と泣きそうな弟の電話での会話は私の心の中だけにしまっておこう。何故あの時に時間軸すら越えて聞こえたのかは謎だが、とても嬉しかったから。

「お母さん、おかわりく…おかわり」

まだ少し照れてしまうが、自分でよそわずにお母さんに頼んでみる。

頼ってもらえたことがうれしいのかお母さんの笑顔が眩しい。

「こっちにも頼みたいことがあつたら遠慮なく言うんだぞ。頼られないのもさみしいからな」

しょぼんとお父さんが言う。

「僕にも頼って」

「わしにもな」

二人の声に焦る父。

その光景が、くすぐったくて嬉しくて、私も今まで以上に頑張ろうと決意すると祖父に小突かれる。本当にタイミングのいい祖父に呆れる。本当に心配性だな。だけど大丈夫だよ。

「分かっている。でも、皆も頼ってね」

失敗なく普通の言葉で言えた。嬉しくて笑顔になると、笑顔が返ってくる。とても素敵だ。

「と言う事で誕生日おめでとう」

弟に言われて大人三人がクラッカーを鳴らす。ぱちくりとする私に大人たちもおめでとうと言ってくれる。どうやらあれから初めての誕生日を祝ってくれたらしい。あんなにこだわった私が今度は忘れていたらしい。恥ずかしい…が笑顔で言おう。

「ありがとう…どうせだから誕生日プレゼントにえにしにこれを読んでもらおうかな？」

持ち歩く癖がついたボロボロの本を渡す。あの夢の再現みたいに。

「わしが魔女役かのう」

祖父の言葉に私は笑い、弟は恥ずかしそうに真つ赤な顔で口をばくばくさせている。何でこっちが知っているか分からないのだろう。両親からは服が贈られた。お母さんからは趣味が良いがお父さんからはやはり可愛らしいものだった。拒否されると分かっていたらしく本命は別にあつた。祖父からは本だった。内容については黙秘しておこう。

自然に口角が上がる。この嬉しさがある限り、あの鬱陶しい私はほんとうに独りよがりだったんだと改めて思う。もうあのときの様なことにならないように胸に刻んで前を向く。

だから、決意表明。

私は、これから努力するよー。人に頼ることも人から頼られることも！人魚姫、見ててね。今度こそ忘れないから。